

---

# そんなのありますか？

高遠 陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そんなのありますか？

### 【Nコード】

N3261BA

### 【作者名】

高遠 陽

### 【あらすじ】

いきなり腕を掴まれて「好み」だなんて、誰が信じるっていのかな。

それでも私の好みを知り尽くしたように攻めてくる彼に翻弄されて……。

いきなりですか

1 .

翌日に休日控え、浮かれて騒ぐ空気が充満している金曜日の夜。気のおけない友人 伊藤 千紘<sup>ちひろ</sup>とわたしこと八重野 環花子<sup>わかこ</sup>が気を抜けない話でけん制をしながら盛り上がって飲んでいた居酒屋の暖簾をくぐって外の出たその瞬間、いきなり手を掴まれた。

目の前には、なぜかスーツのグレーのヘンリボーン。呆然として顔を上げると、そのスーツの持主は照れた笑いを私に向けつつ、名刺を一枚差し出した。

『居酒屋チエーン 山木屋 統括本部長 山木 漣』

今出てきたばかりの居酒屋の名前が書かれた名刺だった。

まじまじと名刺を見て、そのままその名刺を持っている手を見ると、意外と線の細い、労働なんて知らないと言っているような手があった。

「好みなんです」

その細い手とは裏腹に、低く重みのある声が頭の上から降ってきた。

驚いた。

本当に驚いた。

居酒屋の一番忙しい時間帯には相応しくないスーツ姿で、そして軟そうな（と言っては失礼なんだろうけれど）、擦れていない表情<sup>かお</sup>を柔らかそうな長めの前髪で隠すように私をじっと見下ろしていた。

「え……つと？」

「店にいるときからすごく好みの子がいるなって思ったんだけど、全然目線が合わないから追いかけてきてしまいました」

「環花子。先、帰るね」

私の横でくすくす笑いながら千紘が私の肩にぼんと手を置いた。

「えええっ！？ちょっと待ってよ、千紘！」

「たまにはナンパされなさいよ」

「いやっ！？これってぜったい千紘の間違いでしょ！！」

確かによく二人で飲んでいるとナンパはされてきたけれど、それは大抵千紘が受けることで私ではない。

特出しているところは168cmの身長くらいという平平凡凡な私とは違い、千紘は女の私から見てもかなりの美人だ。

豊かな栗色の髪はうねって背中まで届いているし、大きなヘーゼルの瞳が黒い淵に覆われてそれは魅惑的。鼻筋も通って横顔はまるで絵に描いたみたいで、唇は今キスをし終わったみたいにぷっくり膨れて魅惑的に輝いている。身長は160cmにちよつと届かないけれどいてるところは出ていて引っ込んでいてところは引っ込んでいるという、羨ましい限りの体型だ。

そんな千紘と一緒にいれば大抵ナンパにあつてしまうので、この男も店から出て行く私たちにあわてて、間違えて私の手を掴んだに過ぎないに決まってる。

「いえ、私はあなたが好みなんです」

決して細くはない二の腕を掴んだまま、恥ずかしげもなくそんな言葉をいう。

「環花子を見染めるなんて、久しぶりに人を見る目のある人だわ  
ー。ここは安心して私は帰るね」

「ちよつとおおおつ！逃げるなっ！」

「山木 漣さん？あまりうちの子、いじめないでね。……名前割  
れてんだし」

「善処しますが」

「ふふ。よろしく。じゃあ、また月曜にねー」

「千紘おっ！？」

千紘を捕まえようとじたばたとしても、腕は男に掴まれたままで  
動きようがなく、みるみる千紘は闇に隠れて見えなくなっていく。  
とうとう角を曲がって私の視界から消えると同時に、もう一度く  
るんと身体の向きを変えさせられた。

「わかこ、さん？名前、あつてますよね」

「いやいやいやいや。違いますからっ！」

「でも彼女はそう呼んでいましたよ？」

ええ、そりゃあもちろん、本名ですからねっ。

けれどもその男は私の単純な嘘ひとなんてお見通しだった。

「どういった字を書かれるのか、興味ありますね」

「……どうして私がそれをあなたに教えると？」

「だって、私はあなたと付き合いたいと願ってるので、そのくら  
いの情報を頂いてもいいと思いますよ」

その時携帯のバイブが肩にかけていた鞆から振動してきた。

「ごめんなさい」と一言断って、あわてて携帯を探って電話に出  
ると、相手は千紘からだった。

『やほー。うまくいつてる?』

「何よそれっ。いくわけないでしょ」

『ふふ。あのね、その人の身元、インターネットで検索したらちやんと写真付きで確認とれたからね。安心してナンパされなさいよー?』

ツーツーツー

千紘……。恐ろしい子っ。

切れた電話をまじまじと見ていると、件の男が目の前に立ちあがって私の手首を捕まえて、スタスタと断りもなしに歩き始めた。

「あっ……。あのっ!手を離してください」

「金曜の夜ですよ?人ごみにまぎれて見失うのも嫌ですから、手をつないでいたほうがよいでしょう?」

「ここには歩いている人なんて私たちくらいですっ!」

「あー。まあ、そんな感じですけどね」

どんな感じだ、どんな。

どこか行きたいところでもあるのか、迷うことなく歩く様は、きりりとして格好いいなんて思ってしまったけれど。

……やっぱり少し展開についていきません。

いきなりですか（後書き）

## 紅茶ですか

2 .

「わかこさんは、もうお酒を結構飲んでるから、お茶にしましよ  
うね」

「誰もあなたとお茶に行くなんて言ってます」

「このあたりに紅茶専門店があるんですよ？知っていました？」

紅茶専門店？

どうして私が紅茶が好きだっことを知ってるの？

軽く眉間にしわが寄るのがわかったけれど、それを止める手立て  
もなく。

そんな私を見下ろして、ふふふと得意げに笑うこの男の笑顔が  
よつとだけ可愛かった。

いやいや、可愛いなんて思っちゃ駄目でしょ。

ここは逃げる方向でっ！

「どうして知っているのかって？……簡単ですよ。珍しいチュ  
ーハイを注文していたでしょう？だからです」

ああ、なるほど。

確かに居酒屋で『紅茶チューハイ』なるものを頼んだ記憶がよ  
みがえってきた。

紅茶好きには冒瀆的なそれは、それでも試しに一度は飲んでお  
くと興味本位で頼んだお酒だった。

……二度とは頼まないと思うけれども。

「珍しいからオーダーしても、本当の紅茶好きの人には受けがよ



くないんです。一口飲んで嫌な顔されるんですよ。紅茶シロップを混ぜただけの、予想通りの味だって。わかこさんはまさにその通りの顔をしてたんです」

本当に私を見ていたんだなあって、妙な関心と得体のしれない不安が襲ってきた。

この人、どこまで私を見ていた（もしくは観察）んだろう。

「だから、紅茶がよほど好きなんだなって思ったんですよ」

ふんわりと柔らかい頬笑みを私に向けて、その人は迷いもなく歩いていく。

言われる通り、確かに私は紅茶が好き。

紅茶葉専門店にも欲しい茶葉のためなら入荷日を確認して買いに行くほどには。

だから夜の八時という時間帯に店が開いているとは思えないけれど、それでも専門店という言葉聞いて試したくなったのはもう病気の範囲かもしれない。

「ほら、あそこですよ」

白く綺麗な指の先には、蔦で覆われた英国調の店構えの、青銅でできた看板がほのかな明かりに照らされて開店していることをうかがわせた。

店の扉をあけると、重厚な木と暗い色合いの壁紙、そしてところどころに照らされた照明がまるで英国のパブ（喫茶室ではなく）の開店前の静かな空間に紛れ込んだかのような錯覚に陥った。

「よい雰囲気のお店でしょう？」

「……はい。とても……落ち着きますね」

閉店間際なのは見て取れたけれど、その男はなじみの客のようで、マスターにお願いするようにコクリと頷いてから奥まった席まで私を連れて行った。

そして椅子を引いて私を座らせると、そのままマスターのもとに言って何やら話しこんでいる。

その間、店内の装飾をゆつくりと見回して雰囲気を楽しんでいると、両手にケーキを乗せた皿を持った彼が帰ってきた。

「好きだといいんですけど」

出されたケーキはタルトタンとシフォンケーキ。

この男<sup>ひと</sup>つてば、どこまで私の好みがわかつているのだろうと疑いなくなるくらいつぼをついてきた。

「紅茶、選びましょうか」

「そうですね。……いえ、選んでいただけます？」

「えっ？ 私が選ぶんですか？ このお店は種類も本当に豊富ですから、わかこさんが気に入っている茶葉もありますよ？」

「だからです。もしあなたが私の好きな茶葉を当てたら……」

「当てたら？」

「私のこと、教えてもいいですよ」

あんまりにも私のことを知り尽くしているような錯覚に陥ったものだから、ちよつといたずら心など、起こしてみた。

わかるわけなんて絶対ない。

居酒屋で私を見ていたくらいじゃ、当てれるわけなんてないはず。

挑戦的にならないように気をつけながら彼のほうを見てみると、長い前髪に微妙に隠された目が、じっと何か言いたげに私を見てた。



## 名前ですか

3 .

「さすがにそれはわかりませんよ。何か手掛かりを頂かないと」

とさつと背もたれに身体を預けて、その男は困ったように呟いた。  
でもね、困らしてるんですよ、私としたら。

正解なんて、してほしくない。

けれどなぜか正解するんじゃないかって恐れてもいる。  
そのくらいこの男に脅威を抱いているのかもしれない。

思い立ったことを口から言ったおかげで切り返しがうまくできなくて黙っていると、助け船を出すようにその男はこう言った。

「じゃあ、必ずこのメニューの中から選んでください。そして、紅茶限定でお願いします」

そうして差し出されたメニュー表には、紅茶のほかに烏龍茶や緑茶のフレーバードティまであって、合計百種類くらいはあるんじゃないだろうか。

たしかにこれなら『紅茶限定』って言われるのもわかる。

「ところでわかこさん。さっきから名前を呼んでくれないんですが、名刺、ちゃんと見ていただきましたよね」

「ええ。拝見しました」

「じゃあ名前を呼んでいただけますよね」

「いえ、それとこれとは違うんじゃないですか？」

「私のほうとしてはこれから一生わかこさんと生きて行きますの

で、氏よりも名で呼んでほしいのですが」

「いやいやいやいや、いつの間にそんな話に?!」

「ん?今ですよ。ちゃんと『漣』と呼んでくださいね」

呼べるかつての!

どうして有無を言わずここまで連れてこられているのに……まあ、紅茶専門店ですられているわけでもないけども……そのナンパ男の名前何て呼ばないといけないのかな?

「嫌です」

「そんな即答しなくても」

「いやここは即答で!それになんで一生なんですか?」

「それは私とわかこさんがこの後よろしくなって結婚するからでしょう?」

よろしくなって……ってなんでなるのかな?なるわけないしっ!その上結婚話なんてしてんじゃないわよ。

無邪気ににこにこほほ笑みで目の前の男をどうやってたらやりこめることができるのか。

腹の中がぐつぐつ煮えたぎってくるほどの怒りが湧いてきた。

見た目がいい男なのは見とけるけれど、だからってこの暴挙はいったいなんだ?

優しそうな顔をして、やってることがえげつなくないですかーっ?

「どれにするか決めました?」

「……なんか、私が言ったこととちよつと趣旨が違ってなくないですか?」

「そうですか?あっていますよ。私が選んだのとわかこさんが選んだのが合えば、あなたは私にいろんなことを教えてくれるのでし

よう？楽しみです」

なんか違うくないですかっ！？

下手にこれ以上突っ込むと、また言葉尻をとられて自分の都合のいいほうに持って行かれそうなので、ここは口をぎゅっとつぐんでメニュー表を目で追った。

あー、ほんとうにいろんな種類があるなあ。

ストレートが好きな私はあまりフレーバードティを好まない。

茶葉に付けられた臭いが強すぎて、紅茶の素の味が無くなっているように思うからだ。

一度海外の茶葉専門店の紅茶を缶で購入したことがあるけれど、あまりに匂いがきつくて飲んでいるうちにふらふらしたことがある。もちろん例外もある。

アールグレイはフレーバードティの中でも大好きなもので、よくアイスにして飲んでいるし、ホットでもストレートに飲む後にミルクを入れて味をマイルドにする定番も好き。

けれど今はその大好きなアールグレイよりも目を引く茶葉を見つけてしまった。

珍しいその茶葉は、時期があつて、今はそのときじゃない。

それが表記されているということとはよほど仕入れをきっちりしているんだろうなうって感心してしまった。

うん。この紅茶にしよう。

オーダーする紅茶を決めたものの、まだまだメニューには飲んだことのないお茶や見たことのない組み合わせのお茶もあつて、メニューを見ているだけで紅茶を楽しんでいるような気分になって嬉しくなってきた。

それにさつとメニューを見流して紅茶を決めただなんて、思われなくもなかったし。

少しは知恵を働かしたつもりで、時間をおいてメニュー表を閉じた。

「決めました」

「はい。そのようですね」

相変わらずにここにこと笑っている彼に、気持ちだけでメニュー表をぶつけた。

なんでそんなに余裕があるのか、まったくもって理解できない。

## 長女ですか

4 .

焦げ茶色の革表紙のメニュー表をぱたんと勢い良く閉じて、その男は嬉しそくに微笑んでいた。

「さて、どうやって答えを合わしますか？」

「お互い、このナプキンに答えを書くというのはどうですか？」

そういつてテーブルサイドにあるスタンドからナプキンを二枚取り出すと、一枚を自分に、もう一枚を彼の前に差し出した。

鞆からペンケースを取り出して、ボールペンも添えた。

「わかこさんって、長女ですか？」

「え？……えーっと、それはゲームの賞品対象物件なので、お答えできません」

「それは残念です」

答え合わせの前から何を言い出すんだと思ったら、それは単純に私の鞆が重たそうだからという理由だったそうだ。

一概には言えないのだろうけれど、長子は鞆の中になんでも詰め込むそうで、私が鞆からペンケースを出したことや鞆の容量からみて私が長女じゃないかと思っただけみたい。

正解ですけど。

やっぱりこの人、見るところが人とは違うような気がする。

「じゃあ答えを書きましようか」



「私から」と言つてボールペンに手を伸ばすと、私に見ないよう  
に指示をしてからカリカリと文字をひっかく音が聞こえてきた。そ  
の音に迷いがない。

「わかこさん、どうぞ」

すいと差し出されたボールペンに、ほのかに温もりが感じられた。  
……そんなこと今まで思ったこともないのに。

微妙に意識しているんだなと自分に苦笑しながら、やっぱり私も  
書いているところを見ないようにとくぎをさしてからナフキンに答  
えを書いた。

「じゃあ『せーの』で」

「はい」

「『せーの』」

『s a k u r a』

『s a k u r a』

テーブルの真ん中にとんと置かれた二枚のナフキンには、予想通  
り同じ茶葉の名前が記されていた。

『s a k u r a』の名の通り、それは桜の葉をたつぷりと使つて  
作られた、桜の香りがやわらかい春の紅茶。

以前勤めていた会社の近所の紅茶専門店ですべて初めて出会ったときは、  
これほどまるやかな紅茶に出会ったことはないと思ったものだ。

「……どうしてわかりました？」

やっぱりわかってしまうのかと思いつつ、それでも驚きを隠せず  
に彼を見ると、逆に自分が当てたことに至極驚いたように引き気味

になったかと思うと両方のナフキンを見比べてほっとしたように息を吐いていた。

「まぐれですよ」

「うそ」

「うそじゃないですよ。……そうですね、強いて言えば口元、かな」

口元？！

どうして口元で私の好みがばれたというの？

視線を固定するとわかってしまうかもしれないと思って、お茶を決めてからもメニューをあちこち見ていたのに。

「まず視線でだいたいわかりますよね。上下左右、どちらのメニュー表をみているのかかは。けれど何回か目線が固定されたときに、一回だけ、口の端が少し持ち上がったんですよ。それをみて、お気に入りがあったんだって思ったんです。違いましたか？」

うわあ、信じられない。

この人の観察眼っていうのがあり得ないと思う。

「あとは……ずるいと思うんですが、先にケーキを持ってきたからね」

「ケーキ？」

「そう、ケーキ。これって重要ポイントだと思うんです。タルトタタンとシフォンケーキ。目線のところにあった茶葉で、このどちらかのケーキに合いそうなのを選びました。sakuraなら、まるやかですからシフォンケーキに合いますし。逆にタルトタタンならアルグレイかなって思っていました。ただ、その目線の先にはアルグレイはありませんから」

別に得意げに披露するわけでもなく、自分が感じたとおりの事実を淡々と話しているだけだとわかる。

正直、引く。

ちよっとしたしぐさで何もかも見透かされるんじゃないかという不安が付きまとうけれど。

けれど、面白い。

面白すぎる。

「面白い、ですね」

だから素直にそう言ったら、彼はきょんとして「そんな風に言われたことはないです」とわかるかわからないか程度の小声でつぶやいた。

## プロポーズですか（前書き）

お気に入り登録が100名を越えていました!!

嬉しすぎてどうしていいかわからないほどです（T・T）

読んでくださっている皆様、本当にありがとうございます!!

これからも努力していきますのでよろしくお願い申し上げます^^

## プロポーズですか

5 .

照れているのか少し顔を伏せたその人は、それでもゲームに勝つて得た権利を行使しようとしてか、机の上に肘をついて私との距離を縮めてきた。

「お茶を注文してませんでしたね。やはり『s a k u r a』にしますか？」

身構えていた分ちよつとだけ拍子抜けして、それでもこの季節に『s a k u r a』を飲める喜びのほうが勝ってしまつて嬉しさのあまり顔がにやけるのを止められなかった。

「本当にお好きなんですね」

「はい。時期的に無理だと思つているお茶だったので、まさか飲めるなんて思わなくて。私はやはり『s a k u r a』をお願いします」

「そんなに喜んでいただいて、ここに案内した甲斐があります。じゃあ俺は『デイクサム』を」

話の腰を折ることなく現れたマスターに注文をすると、二人でまたケーキを挟んで向かい合った。

改めて彼を見ると、やはりこの人は不思議なほど優雅でやわらかそうな雰囲気、居酒屋のあの活気に満ちた場所で仕事をしている人には全く見えない。

『統括本部』って書いてあったから、居酒屋での仕事ではなく、オフィスでの事務仕事なんだろうけれど。

でもそうすると、なぜあの時にあの店にいたのか説明が付かないような気もする。単に視察とか？

「山木さんって、あの店で働いてるんですか？」

「漣、ですよ。わかこさん」

「山木さん」

「……まあ、今はいいですけど。さっきの店にはたまたま顔を出したけなんです。ちょうどそこにわかこさんと連れの方が入ってこられたので長居をしてしまいました」

「？」

「店長と仕事抜きでも友人ですので、たまに顔を出すんですよ。で、さっきあの店にいたのはその『たま』だったわけです。」

さあ、今度は俺のターンですよ。

わかこさんのフルネームを漢字で教えてください」

『s a k u r a』と書いたナフキンとボールペンを差し出されて受け取ると、私の名前を漢字で書いた。

『八重野 環花子』

字数が多くて子供のころは苦手だった漢字は、大人になった今は結構気に入っている。

「綺麗な漢字ですね。花冠っていう意味ですよ。」

「わかりやすいでしょう？ ロマンチストの父が、母にプロポーズのときに指輪の代わりに花冠を編んでおくったんだそうです。それを母が甚く気に入って、それで私が生まれたときに名付けたんだそうです」

「それは素敵ですね」

「はい。素敵なんです。だから私もそういったプロポーズしてくれる人と結婚しようって小さいころから思ってるんです」

うわあああつ。

私ったら何を言ってるんだらう？

この人に『プロポーズするならこういう風に』なんてリクエストしてるみたいに話してる……よね？

「それはいいことを聞きました。では俺がプロポーズする時はお義父さんよりももっとロマンチックにプロポーズを演出しますね」

「いやいやいやいや。別に山木さんにそうしろなんては言っていないですから」

「いいえ？十分にそう聞こえましたよ？大丈夫。俺は約束を守る男ですから」

嬉しそうになっことりと笑いながら、水面下では手が伸びて私の手を包んでいますけれど！？

いつの間に？？

「おや。漣君は結婚が決まったのかい？」

声のするほうに顔を向けると、マスターがポットとカップを乗せたトレイを持って立っていた。

「それはおめでとう」

「ありがとうございます」

ちょっと待って！

今の話でどうしていきなり結婚が決まるっていう方向に？それに山木さんもお礼を言うなんて、おかしいでしょ。

「違いますよ？私の両親の話ですから」

「それは失礼しました。早合点だったようです」

丁寧に挨拶をされて、マスターはカタリと小さな音とともに茶器をテーブルにセットした。

和菓子を食べているような感覚におちいる『s a k u r a』の匂いが鼻孔をくすぐる。

山木さんが頼んだ『ディクサム』もちよつとは気になるけれど、でもやはりこの気持ちがあるくなる『s a k u r a』をゆつくりと味わえるのは至福かも。

「さあ、どうぞ」

「ありがとうございます」

慣れた手で紅茶を淹れてくれたので、お返しに私も彼の紅茶のポットを持ってゆつくりとカップに注いだ。

決して濃くはない液体が、温められたカップに満ちていく。

紅茶好きの人とこうやってお茶を楽しむなんてめったにないことなので、ここは無理やり連れてこられたことを少し忘れて、ゆつくりとお茶を楽しもうと思った。



## 交換ですか

6 .

目を閉じて紅茶を一口、口の中にゆっくりと含むと、わざと舌先でころころと転がした。

柔らかな甘い紅茶がさらにまろやかに感じるようになるから不思議。

普通、紅茶を転がすようになって飲まない。

そりゃあ少しは口に入れてからとどめるようには飲むけれど、舌先でそのまろやかな食感を楽しむのは『sakura』でしかしたことがない。

ちよつと変わっているって、自覚はある。

初めの一口を堪能し終わって目を開けると、ほおつと感嘆の息を吐いた。

するとカップ越しに山木さんがさきほどまでのやわらかな頬笑みなんてどこへいったのか、顔と身体を硬直させて私をじいつと見つめていた。

「……環花子さんは……」

「なんででしょう」

「環花子さんは……いえ。紅茶を本当に美味しそうにお飲みになられますね」

まるで呪縛から解かれたように身体に押し掛かっていた力がふつと取れたのか、一瞬下を向いたかと思うと、ゆっくりと顔を上げるころにはこちらが嬉しくなるほどの笑顔を向けてきた。

どうしよう。

ここに珍しい人がいる。

大抵の男の人は、私と喫茶店に入ると間を持って余すか、もしくは私の苦みをつぶしたような顔を見てリラックスできないと言う人が多い。

それは私が喫茶店で出される紅茶というものに美味しさをあまり感じたことがないせいだと思う。

それでも『今回こそは』と思ってオーダーして、出された紅茶にがっかりする、それを繰り返しているせいであきれ顔で見られる事が多かったし、实际いい加減にしろとまで言われたこともある。

それなのに目の前の人は、初めこそなぜか硬直したものの、私と同席しても嫌な顔をするどころか微笑んでくれている。

こんなに楽しく紅茶を飲むのは、久しぶりかもしれない。

出会う方はナンだけど。

「だって本当に美味しいんですよ？もちろん山木さんがオーダーされた紅茶も美味しいと思います。……飲まないんですか？せっかくの紅茶が冷めてしまします」

「いえ。あまりにも環花子さんが嬉しそうに紅茶を含んだものですから、ちよつと見惚れてしまいました」

「見惚れ……？」

「ええ。ワインのテイストでもしているんじゃないかと思うくらいに口でゆつくりと転がしていたでしょう？転がすたびに顔が緩んでそれはそれは美味しそうでしたよ。こちらが欲したくなるくらいに」

その言葉に載せられた意味に驚いて目を見張ると、驚くほど間近に迫っていた山木さんのけぶって色濃くなった瞳とぶつかった。

明らかな挑発。

さすが有無を言わずここまで連れてくるだけはあるなっと思ってしまった。

軽く抗議の意味を込めて不作法にならない程度に音をたててカップをソーサーに戻した。

「お飲みになれます？美味しいですよ、『sakura』は」「これは……返されましたね。でもまあいいでしょう」

自分のカップを持ち上げると、少し冷めた紅茶を飲みほした。

「ところで名の漢字は判りましたが、連絡先の交換をお願いします」

「え？だって私、名前を教えましたよ？それでゲームの賞品はおしまいです」

「環花子さんは『私のことを教える』とおっしゃいましたよ？それは名前だけじゃなくてそのほかのことも付随すると思いますか？」

「私のこと……ええ、確かにそう言いましたけれど。でも山木さんの言葉の逆もありでしょう？私はちゃんと私の名前を教えましたし」

「どうしてもとれる言い方をしたのが失敗だとあきらめて、私に連絡先を教えてくださいな。赤外線、使います？」

私の言うことはスルーですか？！

というか、私の失敗扱い？

「環花子さん。携帯電話を出してください。プロフィール交換しましょう」

「なんだか山木さんって、慣れてません？」

もしかしてしょっちゅうこんな風に誰かを微妙に拉致していると

か？

だから妙に落ち着いていて、切り返しがうまいんじゃない？  
私、プロフィール交換しても、大丈夫なんだろうか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3261ba/>

---

そんなのありますか？

2012年1月14日15時49分発行